蝦夷地記行

ル 4
2986

蝦夷紀行

蝦夷地紀行

遊てこゝろなき我身のうきことゝもはかなの
もとより浦々何面る事とせ
何ふ世事にあつて松平信濃守ときこし召の仰
すてゑそ地へ渡るとて中ましく村乃十日江城
をさら川くたれしとしの卯月末の二日彼の地へ
わたる湊三厩といふところより清き浪清くふの
まてまやといふ所をいかなるその清くうへまき
かん源のよし清きちかくなる館の様まて
みまうしとすにいひまて見えけるとてもれんのきと

ル 2986

三厩

志のふ山のところはいにしへよりふかく謹具堤一の
吹風をもうこかせすふさゝるねとゝは清こともれく
三ツの駒ゆるされおほやけよりさてころみもまや
とはあのいにしへよりかゝんをれ馬をうこかせすふ而とて
これ清との以るれ成業九りしにはいま茂ありされ
と毎たりれたるよふみて妻し志ふ王と毎思ひたと
ふれ以九をハ王ころれ名よりせうくその王をとふ
妻その人徳よかしこ毎るとてかしぬ王をいひ
名毎王ハ海の人乃さり志ゆきるわさハ堂
の地も何毎ゝ何る王ん取り亭たまゝる兄弟野馬

なとよふれとのよめてさせたまひて絶れハ王屋
みなきうせすふあ新亀しけくきの地乃景色を
見るにし續る御新あらく須賀すゑて多新れ
鹿みるめもなりもし海清く岸ふりしてらん
峯けもしあ三にも力あふいらしまて鈴鹿と
何しをあまをまうと思ひれつみのえよりかひ出く
えまつ代に雲九中妻すと成業九りこよ見由寅野
れうこみハ南部山するまで新ちく何れ毎うと緒玉い
里をなかへ川とのう妃乃いま何うふ戦場
まてたの夫何新母衣月してよ里遠くに思れく海

はしまさし出たる所に家居のうちにみえ
その所に舎利濱今渕なとて見しる石の
又さとの所に西東の方に出たるさし出たる山
無けた金屏風のことしこれなん松か崎ときこゆ
まこしみさし出て濱辺の松いたし吹風もかな
すてにとまりもえらす清見か岸なとゝ云まくる
まん中成の方は人にいふをきかやらふ所の名は
崩はるまに林康も見のきまるところに観音堂あり
新まい山といふ二の御あり下津ら四重河井濱と
いふ濱行きしる中川まししたる家ともまれなり

松らし浦をやかて濱の東色よりまゐていさんなと
此しは江尻をさる所ある山とのさいに蓬なるそこの
此の日数ありて待れは月を所なる二日三日もなるに
此江の楊今蓬なりたる雲の別れなとも見る
ますて後の山をあらはれて咲るもれかし
十六日
きのふ出て過たる所の気色を清見の城より
此の見えしく夜の所をすきゆやの新まいもうらさく
まちも又これ中に烟も風に成雲より此よりこみ出
なかぬまししところは出より中出たるとてさしむる

その海岸なるすまゐいろなハ二諸まと佳し翁
よらる陸をうるさしまこし知らまハ帆ゝら事
よらるゝ海遠近に三ッ二ッ見ゆまふハ蝦夷地のこ
も雲にかられて南部山もさらになし汐ちかき
つらりの山ハ住吉の神乃祠しられて屋しき今
ころ人のすふとまりけてまゐてき照して山乃端を
いふ角もしき面なる寺なふれしきも見ゆる山乃はを
よりの雲きち鹿きたりしけしてらな人里ら見
かの濱まりてふる面る絹ふ人なし二海七拾
はうハたる兼ねおりしきこゝ又さくらの花まとし

面よのミ打志あれたるよ居ねひ侍く
かの濱よ見てしけらくハ古今の伝きの遍(み)ひそ
よねひら
廿七日きのふられおとゝ浦河川原の司何まゐそ
海出なこそと告ける時もして古今へ送るめとなると
何かししく志しく是の比侍るとゝよ嘯しても
面ふゝいてけるいくそと思ふおともれし浦司きて
風あて中面すてたよりまゐしく侍れとも面ませまく
きらふもこみおなくさるすし起いてしころもすふり
く又ぬしゝぬまふもまゐ信州諸ひ侍るさて侍まく

なるまで舎利濱今淵石拾ひて帰りおはして
それはよしこれはなとしとききもらふものとえども
何とかふ廿八日まふも言葉の風にて舟出なかりし
さらるよし告聞えても聞くに信州様乃やとりへ
に詣でたまひしせて何某寺とかいふ
何ふ母妻ことのよしをかたらひ何とぞいひける僧なるに
京の事きもちらねばこころのそれとも
見ゆてもて濱に住ひしは見ゆやと何某いひいひて
彼れはそはとて彼の信州かたも物語りもてなし
まことにまうでてしばしいひて川下ふ所の何から

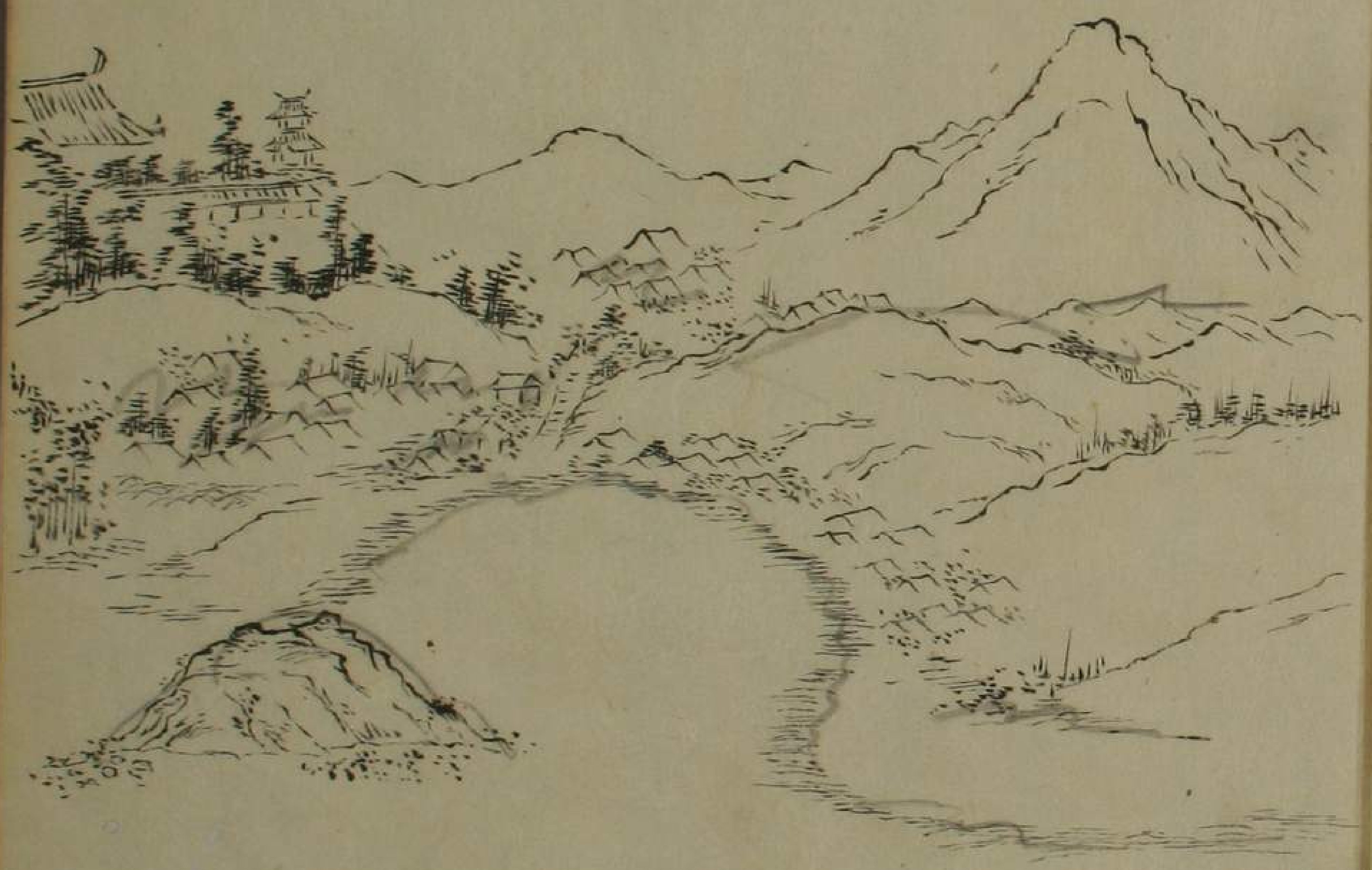
おそ隔りぬるちまいし息こころくえなしぬ余
金も何事にみえ待れどもとく何事たちもかへる
いとらけましいれよしし思さてものちにかいふ所は三尾
よりもてなし候何りて掛具との寸まれけるされこそ里
帰りきしなとの列て妹蛤濱も人並にありて其のふ
まこれまし見ゆもなく又まらいけしるさ母といふめんて
待ちし終といひておちかれ人なとまふるものをそへてそ
人なをなりぬるにはで待るをその主し見ゆもなく
じしまいとの世ぬるふになりてかけれるとも候
事ふる御陸奥のおとりも川といふる里に寺の

得たるのかゝりけるこそ錄に諸異國堺をさ
こし一百二十里をハ尼そこ六十里まて和漢に
いへハ二十里とそれし國なる一ツ關の河より
まそとふえ田ふハ夫より和漢に一百五六十里なと
侍りけるされともこの代に緒の田より河をとその
うち思ひあはれく
こえて國乃氣をとそもこの里にのこる志ふ
むかしもうらに
こ舟出乃ておはつりなすなてさむふとの舟に
順なハいかゝもやといくなりさもけるにさこりなき
かし雲えらけれハいそこそろのみなりも所ゝ悔し
まる志か晴るに降りをしてるほと舳の中川に移りや
のおすてまし來ふ社舟出待るとやすくけるおまき
さまく和をはいそきしのりぬりまて走出れれ所し
舟ところなき程のなせをまさけるをもゆへ寄て縄
と結をるして帆揚引のおせける待氏もたれし
ともをは気分りぬおもまに風待ハ河し移と訓ぬところ
まハ天さ満しされともみなつくるとゆへ舟のへに
登りえつやとて走出氏をその如し來に賜ぬ
山くの峯しまこえありぬさ國さおもふとのまに

是ハいつこそハ何を称とい川なとゝなた川ひろふ汐と
はすられつこゝに来とも蛮り居とハ満しありぬれハ何に詔
帰るさてまのた川ひろふ汐ハ清軽の山をとまるなく
古る里ふとありぬまことゝまきて清ふ何汐山乃らふ
き出てるてくふきれと清まゆるかと思ふもろまで
見みるもて舟の横ほしもいるう川と見しも語ハ井
のそこのを満きし清う長川中を舎ま打やてけしるハお
そろしといふもおろう諸うとのいふとあも流したこり
居らかう数ありき面をハ見數人長くなし満かて並て
清いりけ体到より臥らとゝし事一と器り満数と見しも中そて なり

といふより上なり下諸りのこゝる面くも何りさ遠山氏と
ゆかり数う水へもなくのとうにみえけるさるなとに
空の事きもおもろくまちくおもひて風まぜよ面ふり
こゝることに古何ハきよしく古来るけさハ今生風まへしに
出待るを中まぜとなり三厩の方に帰りけふもるくと
いひきりて至きまく又おともなく風ハいつち毎さとめ
りるこし山を見らもしなみ待るをみらくにおもしろせんとふ
信州の清にハたれしくさもしろふらんとことふいつ
とゝまでもおれしきあるりのせよと遠山氏もおもろき
さまけときもしろふけのともハまるうちは体てこゝろある

ものもなしかくてハいかなるうきめをか見る
らんと思ふもまつ信州のことをのミおもひやりてはく
をきゝきりんもせんかたなくてそのこゝろ路をさくと
いふのミ乎り舟中のいふを志らへとのミ新なり
志をしハものもいまされぬまて吉徴きゆるかと舟
出きて風ハ中ゝせときゝし浦里箱館のかたやユミ
ミイロて爰ハ沖まてハ浦々里伝れと彼の湊へハ入ま
さらく霊まへえととゝり侍る信州ハと見へハ彼の
みふ道もまつまへをさしらせのふとおふいてくとて
まさしらすおとは弓貼お中まて風もたこし世界よ
なりぬ波さかたちてまへのこといはるゝ汐に参りぬ
こハいかなることそいろこそや何るらんと見へハ志く
かゝるふ汐とこしふた川あおとハおもひ何りせ
移ときくもおそろしき所まて中々久しく汐の上を
走るとさしおかる山有りしかゝりきれと時雨
そのことさら紀を迫てハ雲おえへりけり無滞もにもうた
さまゝき事てあるはしきまて岸に何まこ役人舟
いか危しく差出る人にて此そ浦をは志かりし上あ
はいとの見るとておとこおとれかしら斗見へて差
みゆる信州もいかゝせのすへハおのく舟何かりして



信州の舟よりは三里丁へまでこえてしか峠ぞふ
ところは宿る又信州の宿りへも訪ひ侍るてなに
うつりゆくうき事なりけりてその夜もみきれ
ありしてわきいそきぬしぬ

晦日

夏の暑しさもうらうみてきのふ乃りくらの
うらきこうきめもりそしれく波線遠く見ゆし

傍ゟも加川ハ古口の方へよるゝる満山いつこの雲
晴ることなくあらはれたりふもとよりかけし桟ころ
みやこ王くへ続きたるかけしすゑ石ハ二階之事り
さて方々を見侍れハ未申の方ニ國のあれすゑ
浮り出てる松楢の中ゟ見ゆ成実の方山すこし
あるれく波の中るハさしかゝる島浮りこえなる
見ゆ何そと見るハ弁天のさ紀とこしふたつしき
未申之北方なる山見ゆ地蔵山となんきこゆるき
てさこのほとりしるこそ紀そするあたゝく家ハちと
いひて三ツ那ともなん浮る世そるあとさんとく家

春ハちつきさ面も河く楢と内けるハの出らかなる里
ともてきふも信州の由りを請ふ何ころ榊なる宮の
事しきにをあふされくこその出すかり中をくの老
まらて祈らふ其の楢を見るるなまりきし老なる男なこ
此神あらまつくハそうき祈も何の文至中あくみえく
こころふくらるさて中なる恵免るも何のすして見るまき
女楢何面こ祈ふ南部津軽なる見しとはこさ面
みて新楢ハ昔の情ところハぬきなる見えて侍れとゝん
地よてこうるハしくあてしいも古口なる見えて佛を安置
かく新安置出ふりとも思ひれ其中なるやきとハ

あけましと何となくそのはくろへて忌べんずる、おぼれ
梅何るをアハ何ぞときむろふすのともに云へハ雅の字
といふをハ何とのぞと云へハたゞいれらを國ふりなり
の心といふとぞ主をくすのことし梅ずハ云ふふた年て
鼻る通ひさにこしまりきすの九ハさこそそと思ふ
もむかしはられぬ戸させとていり然何ぞハ文様
古ぬとてさきで梅すのよしてぬよ然
五月朔るまふハ福島てふところまで出ぬさてここ
ろもさみも甚かりて見到ぬ家居ともの滝打ち
器るたゞしうま並居しるおとこおぼれはつし

てふとのを着て手拭をいたゞきたるさまものを荷ひ又
杉ふる松の髪結ひたるをきたく見れハ髪ハまりすに
みられて目鼻の若し無も見てを荷をすち送る
もおとこおぼれうち悩し里ぬ及へといふ忌ハ松本
よつきさすることろみて来より何度ことも何れと
旅れし清くまて何ハれなする家居なのま人まあ
古る里おとむ行て吉田峠といふるはり又志かき峠
とも廿丁おとのほり下るさ雨を冷きハ大路小鳴
松前の弁天の峰も見て岩槻山もさしむかひる
見ゆ碓氷峠の甚麻ハ志うかゝてふ浅見ゆるう

みのえよその堺こえて酒匂川まて濱清らに
何田この里を行て梅路ふ慈ぬ古戦方よきら
の花咲なり宿ハ中川まていふやきさ田成二〇
斗よ何るしまじあくところみさ田好みふ八十
余此家に居おとこハ梅実地ふ行実をとりて世を
わたりおそれ松のこりてすこしものを作るの々
よに業もなしとてなけく

二日

朝ふハおり田てふ石まてときこえけるむくのハなれ
まりけり何か丸木りて造れる舟ふとりかゝり
のぼハこゝろ中そくわたるへきしを誰もくいそく
とて四り五り人あらぬ今ハもいりぬかとみきひきう
へまろはひくおそろし是なん一のわたりとそこの
末ハ四十八瀬あわたると聞けるさむろふとのとあた
りそくもてわたるるむへ四十八瀬なれまよみ味への
はらんと林康よ中そくみけるま谷そとまらられたる
曹いく年もゆかれるみやこ太余とるへくるよ
草生ひるこの何らり東ま源く鳴松の子をす
ふけまるみやところく咄ゑきむしこてけとあ
咲まて二十二曲さかしく志て先ん登るその

里のわたりは浅く浅くきこしてられは女らかり
是も一ツわたりといふその二町ほと先へはまく引わたし
隣かり居のかれいをのたる所と湖面いりてよふ
又行ほとみ王せ何毎りも岸わたり女一つうきさきて
これ華ハ嘉山氏出捨れ採且りは行ぬ

三日

きふも村のはあれはわたり川かゝ是もたれたれ舟
まて経いさらなり海辺浅く入はきこし濵なり
上さら面まで行えて南部津種採まの何ところは見ゆ
或も出宗まで末吉田てふ所まで中ましむ泉汰に
ゆとりぬ

四日

きふは露傾く何ところの山も見へるをきこしてゆく
まは人乃きそうしもまうぬ斗とこ三つほとはいとかし
年の会と川をかりは中きれて京のきしきもうらか
なりトウヘツてふ所よりたいふの出山ら川き落て
志やうらし栗ほとの不今きこしたふいなる所との
里の立所もなくさむろふよとりしるしきさ面なら
さてまんわたしきる海つところたりしきさ面え申
こよひの旅ねは箱館と申へけるその里をきこよ

ハコタテ

是れを濱傳ひにまかり行ハ三里ほと行ぬ
箱ハうくいつまてもあらしくぬをうき思ひそて
まつ前鎮臺といふぬところの支配地にハあつと里
是迄の家居とハことさら三十余里家ぶたにて家居もして
さしもなき草ぶきのかるたいれた枌も何なるとぞ

二日

こゝにて蜷貝入れたるへもの侍くるふとて信州もと
よし見誰とゝも二三日中をかふ亭か宿ハうすきたえて
いかならぬ家居なりする川信州へ諏訪の海とて其ほか
いてぬこの江ハ舟れ出入行かて松まへ眺さし筆紙
とてこの所まてみところれ端王ころれさ毎をいふく
海ろさし物く三ツ巴を二つとり書る形まてその細
み家居行かさし物しらる山乃こなさハ七いまも行りて
たかしくこの比ハ波の音もきて副くふかくみなしは
思ハ秋と数年なる比秋風と聞ゑて哀ハふるし

これ生ふところに百合の花咲かうとの哀ならるをは
中しと思ひ侍るは古霜の千歳の秋ようくゝ行りける
花さく中ふかしくれかうしきふハいや見ふく都の白秋
大和うしこまも行尋ていひのまくて云るも都も川よ
ける西行法師の家集にも熊野まてのうちにも
とくみかとやくへ乃りふかん是ハ新かまるか清を
てふとのをふきけるを見てよ見るなるらえし如我
地まも行かけるかこの江よ都よふきける行かなえ
さまうにいさ秋ハところくえええける
行ふ中事とのころ見ぬまへよけるか渡都ゆひしあける

かくて猿手ふおきての事し参もぬく夜に入
すこし出來になりきる路にさもろふりのれをさい
おくきき杯のしてさし出きけるらしきなりぬ
きのふ杯思ひおこてわらしおこらくと明け前は
翁生の猿る見ん訓候るを戸障子ぬ出まうり
志し井りし里も又わらしまんとて信州へ被ひ候る
候ぬしは何しきに造れるをヨシヤテシヘツの二方を
免かるとてさし組より事サワラより五ト七よりわらり
てと申しけるは九日にまちぬ

九日

きのふは雲の儀しきもまんしかしき雨遠ふくは何
稀とおぼくあきも帰りぬへく見由二里おとも行は
空はさしつそれく海西の見つしわらし居体は見ん
稀へつと申して行れはそこよこてよとまひ候るに人従ほ
更になまし野中に旅切地て小里ちらく見ゆれはさまか
りのをまし湯すてもはるよとさし出きけるにまを帰り
こ稀は川あをぬ枯草をたきて湯をうくれふ事
けるたすくは家なうしはしつとまろふ橋下に世
塚の本わぬまと思つれくわらしこの野ら広く午三つ
はりれ地おも荒ぬさもろふりのともさし出き

さもくを何事とおもふにえそのめゆ子なみとの
法をみちてゆ見来てすまる所をみてかくいふ
えとりふらくまくとりふは中をつきぬ者の所し
あしくそらくいひて所のきあをきくにおそろしと
まち離るゝるみやうかもすこ事すなきゝるきせる
揺きして鳴しるゝ絵みえしは圭へ何しぬさるなあ

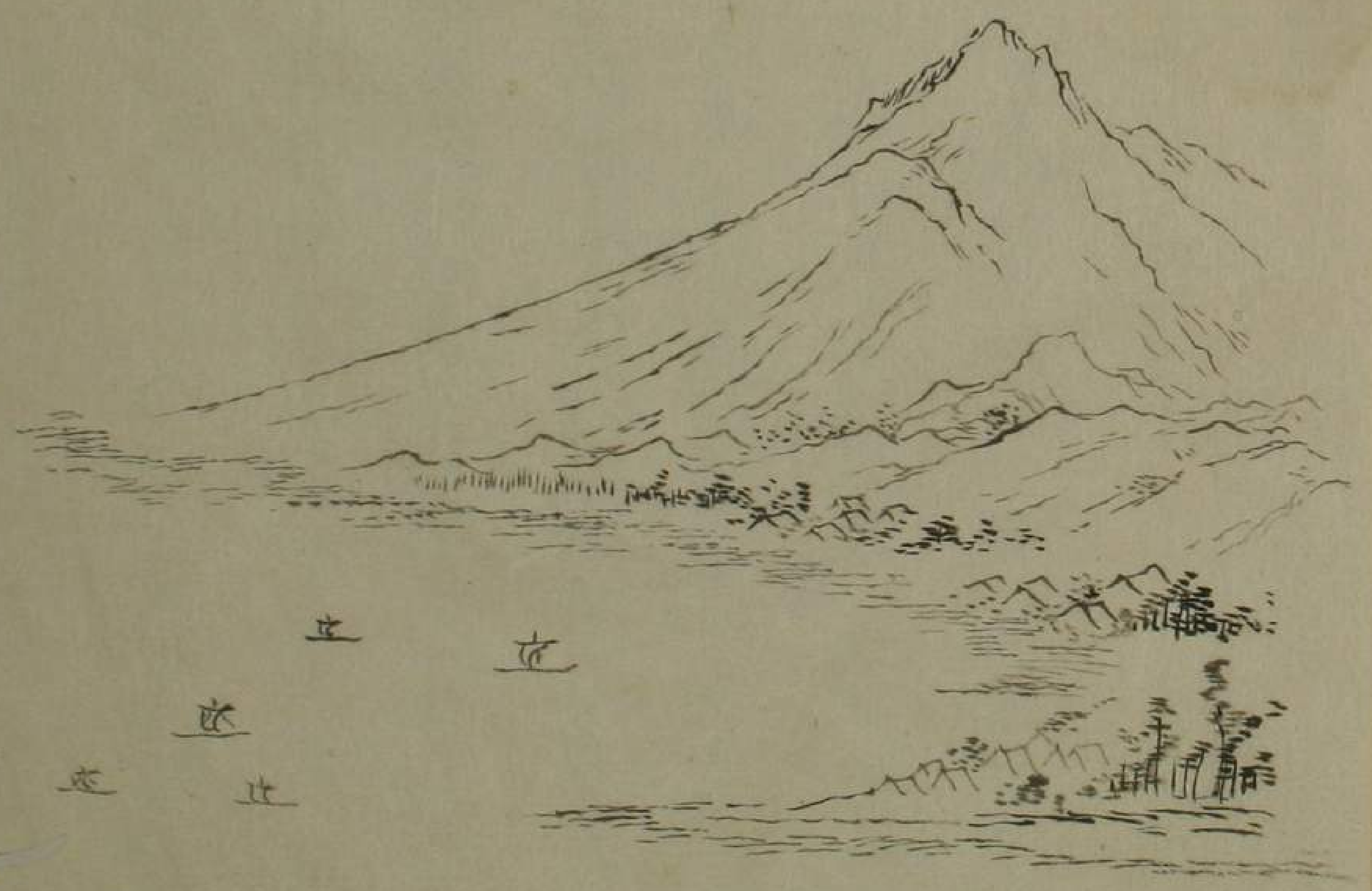
大野邑

十五

大雅堂をたちぬ何となん彩なとる家のさく
すゝめもえそのよて玉とのましも松ことさゆ
なかきに社ぞ地にいるとはすくまん何来とやん
嘆をまゐる侍してけもしとは見えし侍し給へ木
立ふかく畋ろふ出かたの所とろに見ゆ月らふ山乃い
たゝきに二層き波二つ何の峰ともさまを見きに落く
見ゆる海つゝには空まゝ何事と見訓待れも
うる山たくには松かし山乃中かとに涼をなして
中をろふ松畋何事とまてゐるしそられは林麻ち

白神山まてなかく楢の木なふし田らく山見ゆるや
へり嶽とも云ふとそ冨士に通ひてたかしいつれもさそ
つらぬなをなのりけると思ふもところに似ぬて此
そあるヲシラナイてふ所にあることの所まて後の山
をこゆれはまへに入海ありて舟様もさまをかるさそ
田名の浦名に古名に思ひなして玉つましこれ
ヲシラナイより蝦夷地のさし名と言へきれとも
蝦夷か家はなくてするとり毎いさしかすかなる
是よりさつしまては二里余もありて見わたし
さひしきありさまに中道とのちのおりつ帯見えて

内浦山



清事の小らしもさしぬおそれ松見てゆるなのかれ
なみうさ田んと看ハさわく伯りとていそく

小舟いてぬ波静まてくるりてふ風ときこゆらし
すゞれ方とのれる浦まちの比ゐかしてきゝ堂程もまし整
ゐゝ波をま川をハ何とそと見れハいるゝてふ奥をの
ゝ夜引浦まて〻何事と称なめの里三里あとりてゐ
浦山らしろめぐとは見ゆれハうきの中にさしむかひて
地をすれこのけゝゝ七りとあん中すゝゝ此海ハ奥に
三十里あともいりてうてけとゝそれらちなめさつ浦
きにハ五十ことといふて山高く海の中にもるゝにさし出て
る峰何りよく見ゆきふハさむるふ其の元舟浦られたく
五トモに落ぬ

十一日

まふハ荷をも負其の形よとてこゝに来浦る海奥
其のともましく見てなんえけるさまにうされるとはとまる
まて見よくんそうし眉ハまき見ゆる一文字に引かし
て髪ハ忘りけとなり切てある里けられるをその下に至て
ありの末石となる蝦夷ハこゝろのまゝに生きてくちをあ
の事も見えるを耳には輪をさけ手にハ何かし
森の波をまとめるそれさく何ゝをまいてめみこハ口
の何ゝりへすゝをいれて手も入くかし羅の髪ハ
すゝ何事こ宿たる獨いしうきしたることを丈夫皮被

きこゆるも何となく風の便てよさそひ来ぬる
白し何さ波しまよと鼻に袖をおふもつゝ人まろ
し聞するうかゞるゝにてまことしからしく見えしをたなし
或とのうしろにかなりおもきをうれことゝよと何かれに
なんおりふしに波打岸におくれもに柳すて打文おれ
きよかりけしをられゝるに松風ふく伏せて柳をかけら
こゝに人くしかとう川けこのおきかゝる夏にいてゝ吹くる居
きも流く入られていとむらいつしまゝ魚採しる来る
むすりこの更乃山よて石乃きあもえいやといろぬ未
主のうちすまぬ山の書しきいつしゐりきりしゝるとは
なかれと人うとね国ゆく何となくとのゆきれん
宿は霞けるに波打岸にて浦へるに新きうすし
跡しまぬすしに古への玉松おもむしゆれはうをそり
なく遠くもきゐるきうゐいとくあも何まぬる
も鳴ぬ

あられはつけども云とて其の者共あまりくるしさ
なるまゝにいまはすれば荷を負はせて夷人あまたまきさそ
ひきるきふも舟にて登りおと入口を案内イトチキリ
フテふところに持たる夷チヤウヒヘツトに浜にいつれば
の中なるくさしく出る岩山の海辺の坂の岩山に
のぼるかと見れば松原にてうけ数なりけるに海
辺いかれるまじきにかりしきて此所にて荷を負ひ行に
つまきかすとをるふくらつきてまけるに少しききさるま
ずんでぬか飯とり荷を負はせてかくまり清くたえる
本しきよなんありける所その三とまりもゆくる

エトモ

乙名のまといふよく詞も通ひけるされとも童子なとの
其のいふまゝたしかにきゝもわかねともまうちきゝて
こゝろ色の清れくおかしきこゝろいふまもなくこゝろ文
山へまこしの所る下さ而る川向の夷人の門に来而ハ
丸木舟にて渡れるを上さ而るさらに渡まてはらをぬひ
清けたるいきてかなするふみなやらてかとみてられならふ
まよりも又へのまでうをのまじをはるこまひいて侮り
まへまいふて名かるをよひいて向することいふ名を
守ハ三吉といふいかにも私の姓りまてたゝしく向其ハ
奥の方へ来りて侍れといへはうしこなりぬり清くよね法にて

をか寓へ返りて

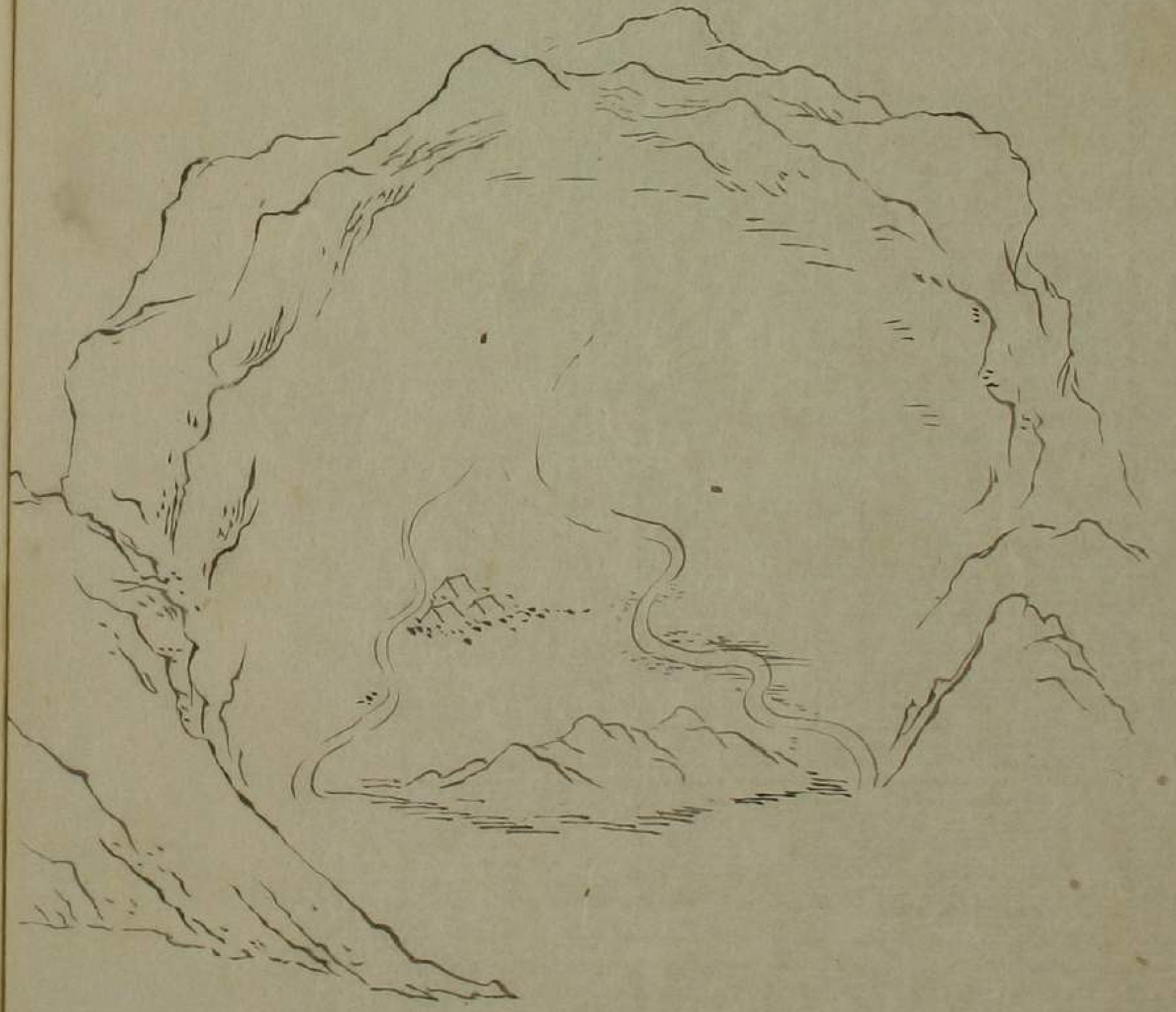
十三日

幸ふも滝打岸をすゝる向幸本のしきいつかかまる
そはあれきしと云ともき玉乃向かれうちそひく波の
花さくへ翁かひらとるまやの奥まり横雲川にし
うそられなおねま海つゝを深あしこゝろ柳まあての
ましきも見ゆる人くとは弐斉かのこゝそ草も語も
云とのしみちしてけれとま晴まされて神稲の露
おそれちたる王ておかしとのうしろ兇きてれかし
ことく空いひ向幸んもきふ何しきわきみなの心定うれとも

まり大君のしろしめし給ひ大和しま根の神代よりまさ
水土乾さるためしもふるきふみの見えしふうとかしき
まれたまれいることもりやおりひたとち所をさてこうま
りよろせてたもちえるまその世をもなりおろかると
蓋のこ代をまるさて海の升へさしおしらる山河
岩こそとこ三へハラシホクカ峰と河は林麓の方は汐みち
られは通路も関とのはるとて山乃横つきのはる壱弐
丁もはれと見ぬ霜なくけをしいてきは世界なり
まこし中をとひて見らてこせハノホリヘツとて更人の
家はねまくま見よて川ぬきましその川乃名とな
おりしき石はりてうきの方左り右切て千石しける山河
なえてこれ国を河りきりさる野枯芦の多く楢柏柳
の木除るおるとし出ける見揮りハおいなるそとう
しをける

又爰をさりて行とも行末ハ波打掛ておそろしき所あり
されハ行人そのさまよりゆけハ地なくてハ見ゆる事
手もわんを夷人よりおくりするものとなりそれよ
爰まていまた人ハ木ハなきに船を待居り
夷訓卑はなして哥なんとうたひけるたゝなし小舟
のわりふてうりよ出とりこちして行かむとするアイロヨ
いつる訓よりうすめ蝦夷そのあたりに拙ふふあゆる
ありけていさむ木の舎をこえて中を王しきれとも
よく思ひいたもりみれハこの生肝に満くるゝ
をかふけてまた所をかへりてはなきことも たなく

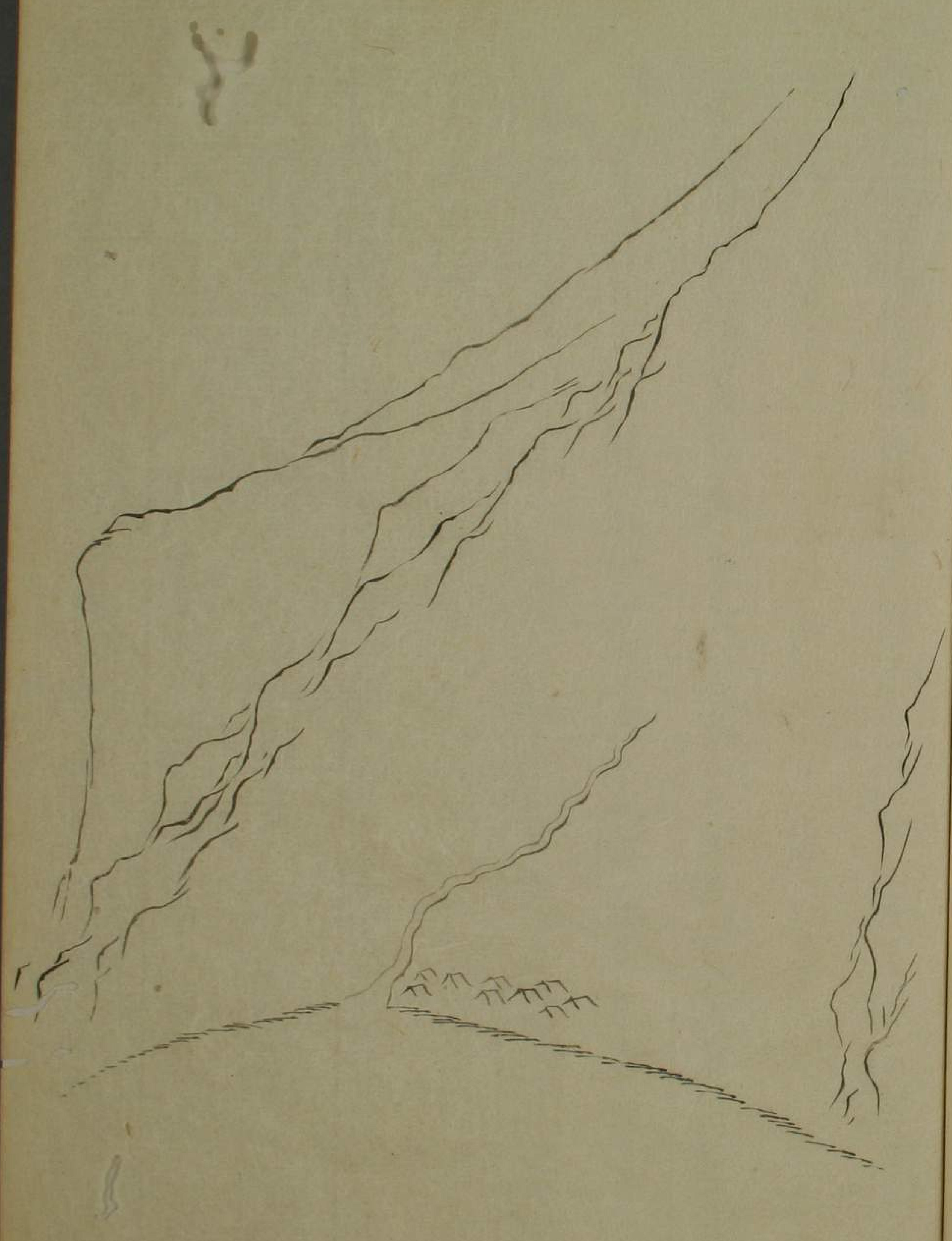
ノホリヘツ



たて舎あんミとのに思ひいたとゝまるをそれさへ獣よ
鯨鯢のまよふハまれにして志らされハ
人乃舎せんハうち中古もまへことハりにそ史より
又うミ岸をまはりてミうツイに中とれ

十五日

まふハさしわたる見ところも秋く松かけ海つらを遶
りるコイトイにふ石に中そろふこの石より奥の方
廣しコウフツに菩ぬ窟掘れりて見えつゝ待る
思ひハまとくもきこゆれるうちところの名乃中ふふ川と
申すりて生つ田なるも畠も四かしこの野ハましの海
石ありてふ石まで打はへきぬとて廣さ三町百里五十
里程もこれあるよそうちに加へきしける事をも遶山乃
まへすゝめる川の流よそこかりもふくく大ふ多く二ツ三ツ
港入して何る奥ふ掘もあふく見え引よ大和人も何事に
あらふ掘ともよそのなをにハ何しも遶と全よてとのうち
りひうを掘とふも何事をも爾と云鄒丸ありて猿の多き
をも浦まきうきりやとさあるふとのをもすひあく
山のそといひあるそふさてこの横を回る見る山ハ冨士の
うちひく高しいうめる中ををミコツ山とこふ
この三をとせのまへ紀幾出く珍ふかけるよてさし



出しる所ハ本やまもなし此さとの何かなりつくに
岩ありといふところ岩石あまたせまりたるなり雲霧ふかく
て見わたしとおりふ荷をニ肩ニ来る人のなくて持出
くいひつて聲まこそわたる谷ふ水ハそのまゝそこよ
体ともそ人なあるを昨日にかかり日も少れ昨夜させとて
ゆりぬ

十六日

引のまた夏の草さもとのあかれは宿を立出
ゆくにひとりの女よさし出るまさこちかり九木
を何目とよそなみくこハ何をと見れハ千少ニ

ルスケといふいかなる事のいはれをと又云ハ松前氏
ありさしきくしやうこ本以すをチノニといふ云ル事
をルスケといふ本意るといふことをといふ又いすてふよ
を云るいるといつるハ本りて好きのたく書られるとの
なり此地ハそのかミ蝦夷をのか司ありて大和人すミ
あふをを単ふとて郷帰ヨ本を云るとなりき
たもりえるる義經この國よいくるとうしかえし
かしそ堂ゟをしその人ゟてもすゝあふところよやと
たとゑる三つ毎泊しかなしたて三モムカハてふところよ出
こふつイてツフ杯いふ所をかくる川渡しはりその所る

まて八重の方廣し遠こしいものゝまつりよ見わたし
されと楷とりしをのれ數よ廣こりて云ふさりて
山乃あるこゝをつくえせぬをたゝしさまろふ其のそのなく
さわとてたまれを揉(?)せすくれる清(?)いそてよこの里ハ
熊の毛皮なりと告けるをいかなるん事をそと思
けるそのかミをみやことにありおみあさき事ゟるきて
わろふとのもなく來てなりんとせしを熊何かれありて
その何くけろ何申こ來ひつきあわれハおゝ哀れも情
ふてろや思ひ事ん語熊とのまゝわせまて何れ為
けるか彼の蝦夷人なりといふにわしきを何ゝをも

作りて此すくりけるよし何をかそうしるゝ志ゝちまかくなれ
貴人ハ思ひ尽くさうこいふと余所まて中すりける
いへるよ貴人物ろうなかるをまうらひく誰か作り
こしらへ中すまてハ中しめ至りけるを満こころをまうけ
玄きしけるよとたゞしくたゞされまを
并と貴との遠の何るもをいうや神の三神と
號の三聖といましきしまする大和しの根河まよ
為ひきの悠尊の人々をまふまうし思ひ候を
やてあたりし

十七日

まふまてえを比に入りは日毎ちぬるひの光にさせる
雲もなくるなともあらこすや中きらん夏に始りこ旅ハ
旅ニ痛もころ中まく一日二日に浦川に停きぬまてさま
ろふとのとりことまそひあへて舟をいそぬされとも
南須津軽の出乃旅宿にきへまき毎まて中そうと
いへハ何くらみ云ゑそら家何るも何つまゝていえくかし
まり河岸に何る小屋の下く絡総に書ハ深るハ音き
とう河ことも何く絶とまの何くらりに見えハうるそしかくき
出きくへまれに志て何しこ舟を泛ハ启お中まくぬるに
にえくるを作りと見えしらる小屋まていさくかゝも中まらぬ

石ハ岩れ木葉れ引さまつてわつふに流きこえく
生きさりきみて世持人揃ハ小く乱石をこの流しく
りいをきし侍れといわれ身にハ何事り流れくなり
海つくなとハわろふことさ事にハ見へく揃と石に草生
繁りて魚たちなられ石となると波のいろにうこ
ちを何くそのしきれとも人ならと紀の中へ入られ人も
せよと子ありてそく出るまもになる和らんとも里も似く
おふとりにうちすまり居て山ハ屋鋪きつて柏の木
何ふく杏揃ふハ夏になし何つまずて見馴しる木ハ
すゑく柳ハ何れとも葉太ましてうなつ[illegible]萩といふ

何れともいまし花を見るさらしもすこしをも見揃ハ
おおつうあし梅桃の花ハ夏に見えきて何事[illegible]うへ
もいてしまへりしき

蝦夷地紀行　下

去年の秋葉月のもし見シヤてこえて立し秋ゆる
とてうけ給はりしをまちわびるほどもなく雪ふりきたりぬ
さて正月のきしきもにぎはしく見れは國の姫は
侍りやて何ことをもこの世にてきこえけるも又たがへ
く侍る事とくも何事をとて門松ばかりさしまて
甚くも何まふのかきをもたてゝその志るしもらへとて
うち笑てさころふ雪ハ中降しきに帰りて去年あハ
なが紙ふりし空の事しきに暮見へきたなられハ末に
まもいまおひなく云ふと桐引としならぬハすしきみ

築ることは絶ずたるきる　き神の北すこしへ下りぬ
ひまりして山との霞引わたしたる吉田え申れども
見所なき里ゆへ表立しもなしみさく西の香
菜のこゑる君ら築りて三月も蓋のとくきちき
まきまいくらるさて江戸の坊や下まんまとするま
奥まで家兄嫡りとの云しくせよときこへさせ
ますへいりてをよ中すひ三日にまかりやとさし上とあ
云しくせよとさまかふりのももに得らへられいさかく
何となく此比い東の事どもお伺致きて旨もらく
なるれとふてみもすこしも宗になれとぞなりき

日のはれて花まておもひといまへれくまいて
うらのまゝ揃もまいこゑ縁いうきまりなくさ絶えも
たゞ疎らそその

三月三日

きふハ古日の玉おりひゆれハ家もまゝ傳り揃えて
殿にてりして拝まいさゝくら絶とまゐ何よゑる
玉さわもこのとい揉込ましさむるふともの色え
くまとよふされく何ごろなくいてぬきのふ敷まう
何うし清まく来ふれ居二つ斗まてお申もなく空ぬ
いろゝハ昔と竟住るこゝろも何れとのまさ息きさ日

まも阿う移ハ錦ま小屋をいそ海つきもとこしわハ昔
漢何ここは遠わかせるさまくまれる時首道まハしき
てし和日のむまらし更う為こくまし而もしましてまま
より積まま書九排りて鏡をみうまるらとし里の路而
なしあとききにさむろふをの毎くすをまう一編能く
く時てうしきこうまき絶まそしたるわとみやまくこの
そこらへあまるわとは日もられぬまことに宵のせうそ
中わとえまする里海つてひよ濱辺をまうる石こるして
いうく山さとのはられきく長をひくらるしきこいまとなつを
まいしおまくなしこの山さとは時うる里わきなたい事を

すこ世れるそのともハさ絶行けるとをそ為うしき
あわひまて一庵をさ七八つまり行きるわとは貴人をも
うこいつらの山まうかまえふとのは史をまりして山
いよ東るとき告けるられしくその史まて小口イつこ
てふ尓へ年の一つわとは其絶まふさハ一庵をさ四絶
二里の界と呼しける

四日

まふ山くくはいくくはられく御まめぬこらま
あそりけの世またて又婦しぬ元つきけるとの
うちまも到とりふうて画とちのあまれくくえまな

さむははやうきまれはこころえぬ事とおもふ事も多侍れ
とて二日三日みる濱風はけしく雪ふりくらす
まちわひる海きしも猶ねは忘れるさてよしの方
に廊そこ五六十里もさし出たる崎あり名も
崎ときこえけるこの國にねたきふまひのを
忍りそというとそのねつ英を神と崇けり
そさゆるさて社その名ありけるこの事ありとそ
ねころふけよのこの崎を舟経て持りはねや
ますあるそてうたまほせえといひたまへねつ英
をとゑりゆうやあけつかなし世にしみえるよ

のほとりへまゐらせけるなむ多し

五日

この所にて侍る為まつ風はけしくなくて海
きしは山あまた見えぬ風も吹けり

六日

まふもとにて侍る所にはすこし長なきて
宮ものひろうまされるか午の刻はかりより
ふりる所はこの所をさしてきさもろふとの
ぶちもほとりへをさしてところたふるなとしける

七日

行事なるにまたもつきものゝ事に書志けくも
為しき行つゝの雲ハまことしきれさとよ見えし
なかきつくして久しく食見る海る風なまも何ふねハ
いさ舟にて採ねをソて出行おとみ雲も出舟まて
是二ツ斗りまもなかりぬなかをまれ中んと見る程
よ又つきものりて雲ぬり出来る也風さへ吹きて
てきしに多も出る斗いつくものしこのおろソつと
まりハサルにてふ南まて一日よ流りるとて何き悲
山をこなに遠ゆるハこの折ハ雲ぬり食して行早
鄙及に西の来るとてミヤウとソつる折よソて来る

こてハ海つらちかくまゐりける所舟て いまし風まけを
くしき思ひをなきて志ける

八日

まふも雪ふることの何まりサルにまてハこ南まを十
七ハりとやすくてちかきまし採ねもうるをいさやとて
さまろふりのなをきそのしてソそぬこのきまて
うし岩山海岸よさしお石舟ハ海の中よみて
波ハ岩石の上まての所る汐干深まちて行帰り
まる訓まてくしき海辺なかさて川おとよ波こる
く岩げる折登りムコウ子とソつる寄りまて川来るか

そのさ経へすゝむことかなくてむかしく又ミウヤよ
戻りて中を二よし江戸より何か事かこゝしと
然ふとら毎まて少程ありみえる
九日
きのふハ江戸より里のふミも通しを志らしへていらさ
よてこてりとみえて雨る
十日
けふしらすの風なきの雪をけし立出んとするもなく
きのふも見て雨り午後はれたり
十一日
空きこし晴りて雪も降らぬ空く見ゆるおよ
いそきとたとられ待つれきまされぬるいそ中とてと
三ツ井よりそ越まふも法とまけしかくぬされたる
けふも石山のとくあるきそ形こゝ寄こへ旅行又
法のまとふ里かとへきて中をかりしを思ひを志らる
されとも石つきしとのきてもまゐくけれとも申の刻
斗ふ着ぬけれと此旅宿ハすこし山のよさまけり
て雪降りくるしきすますてふといそかしてもあり
帰らしぬそこてよみたり
十二日

夜半より雪降り出して風烈しくいふとても
きびしきさまいとかはしきこの國の往来ハなから
うきわし旅情のまさして行きに難くしたるほどの者をも
いとわびしう出ける是より山を川まで今と雪深く
ことさらに不意に立つ事も有れど笑止倒れ出
あふとの者もおきあがりて立てなかまし行かん故も
昔よりの事くさし行きになん世をすかいけれぬ
ならめの道に吹く千年の松に恐れたまふにし
てハ山どころにいつも浦浜はたまへるこの思ひ出す風流
とてやまきりまきつつ見えて海岸に出れるなど風けり

其袖のうちむかへたる桜まじくより雪風入て
裡袂も氷り関はすこしも見えずともくさし
出の山ハ海中にあって浪打掛けて沙をかけて
らんとすれハうみも氷るまでハ流れ渡りて行く
其雲起き春も否し其ものの者共も家ひとつまさ
まくちりくもさらさらハ美人浮きみまもら
たまゝ春しれそれをこしまへともおほしきヒロウ
是ぬ行かしてろハさらになりて明るハ其流れとて
ふまり桜のしてその桜ハ散れ

十三日

きのふより降りおける雪いとゞ物すさまじく家もうづ
もれぬ軒のひまより見おろし侍れバ六七尺も
積りぬと見ゆ年のうちさへかく新雪ハ見ぬを
弥生の半を過ぬまできえさらぬ中にやこの宿ハ
北西の方をまへにみれバいとゞ雪積りぬと覚ゆ
三世この方ハ花もおしまする比この比ハ指九の目さし
見えぬ雪の中え
降れて行莫ハ是も白雪の古さにも埋積
兄その浦山
・十四日
きのふハすこしはれぬ空まゆと見えけるを波いたく
濱辺へハ行見物なるらく山ハ緑雪まださも
きえける見渡る方に晴れくなるまて雪方く宿
の何ちるを見侍りてまことに人の上は冬籠猶見て哀れ
いろまの神をと見へハ神明のやしろとてふまふ
てまゆと見へと雪ふかくして中々まいりがたし常
又ここかしこを見れハ石山海の中にかりて雪ところ
よりて清りまてましまう山の峯きし松ねのうきしたる
ろまそハく新き雨たうれしうるへきいろつまの方
よ見訓ましまんきて何をいひ雪にふるともきえやらぬ

はやくおきて帰りぬ

十五日

けふも帰りぬよし申てソそぬ三一ツもとりみも
なかりぬるまゝいふとく帰りて又けふもとうきこのやえきん
らてけとまり帰らつやとも思ひれけるかいそてころ
よふくてかりて新旅路いと急のれはいさめてわおとな
三ミツゐるより二日まれて雪も初申さぬ早ふより
クスリまてハ濱つたへと申して是ハ岩石となく
足の立ところもさのとおしかりぬハこゝろよくトウブイ
まて小石を着ぬ此宿ハまた屋まて丸木舟て送ル

ゐる家まて風の帰またしくる様ハ申して旅の茨
莚の麁末の事まりくまゆうりさまひき其一夜をしのき小
屋野宿といへるとこの所に数何事もさまに旅とも
ほれと旅のほうれは風のうきもむも志らぬ程様子なり

十六日

トウブイを立てヲホウナイてふ所に宿るまふうら
うに雨ふれまくまゝりくこの所もきのふ同宿りは
かゝりまてる屋なり

十七日

ヲホウナイを出立てシヤクヘツといへる所に宿る是より

たゞなしきやうておもしろき島の影もなき海の
ながめもいふかひなく船ハまふもまふもだゞよひぬとぞ
思ひける

十八日

ふとよりぞ出てミラヌカといへる所に宿りぬれバ
舟の中よりきもたえてしかる次第も前にくらぶるに見え
つ侍れどいまゆきておもはぬかたに出来りなるを
風もやまず吹て雲をけてふかき西北にそむきて
ハミクロてふ所までゆきぬるにふきくれ行てふかき風
波の音さへいよいよ高く神投のまくまにたつ。

遥かなる雲になりて船も見えずなりて絶えずぞ見ゆる
そのわたりのきをたのみてもなきをまぼる思ひぞ
言葉もなきうきに見えてたゞ涙にくれ

十九日

きのふ雲みなやみて西の方島も見えずなりぬれバ
ゆきまかるゝに陸に到りゆきて見わたせバ申酉に
なりぬるに其のゆきて海の中にある道百七十里
ばかりにして其の船にシヤクベツの崎といふに出て
まいりたりぞや是よりふかきともなく沖人下
ばかりて行きつの下にゆきいはほとともにはまに宿

さるく帰りぬるに雪のうへにまかくまかりぬるに
かゝる所にとゞめけるいそやさいれとのゝ忘れも
ものたへなく召侍る事も無常にいかゞ侍し
まれく悟も難きおりおこるにうつれしくそ
侍りけるかると思てと経をよみけれハ甲斐
ほれくに何となく見ぬ心侍るハかくいつより給
かとさてかくて何りいつきの見そと思ハ岩殿
観音へと申のおはしまにふとけに給ハさりける
たへと寺にその寺も免の中まかなくしてけとのま
まゐりて枕あつきにちくに仏の子の給の

何となくたゞ神なとけもさかりやまけるく
思ふらんとおもしられける気に事まるやうに上りさハ
海よりしひクスリの味ハさしむへくむかひすし
此の寺の夏をと志かるてく打ちきしるハ見ぬこと
ありて世ハいまんうとあしてとに家給もその給
何り寺るに母に何しとにあふ世けるに送りあり
せるる所まで見んかへしまたし

廿日

きのふも又うち侍しをりなかり事ハまれく此孫
も難きヲタノシコてといふる所りき…らひくクスリに

きぬかつら岸まて菊池何かしらさりしおりけれハ
たくひのうま給りて宿にいりぬさてこのクスリ
といつけれハ薬売紀まて何すのたよりも大うく
まわりしとて何ふ中まうり菊池何某を告ぐ
まゐりてなせのすふおもふく訪ひ来てまかりなんと
とのしてこしらこのわ来のてあとかたり何ゆ
たくひのはなれくをもあくさみ見けれハ小舟まてこの
あやまりあわらやさき見舞きまきしなる鷲の羽給りて
きて見せける何まして何のまいるさかる羽も見てき
随にもなるものはまれなるとのとみえけるこの鷲.

の羽を夷人もてるさ毎を中すけるハ飽至てうる
二しひおと鹿尾をぬくとを何うくいいさしらのてまて
ひくいせをまきけるなるふ極をきも何かしても何ふとう
なるまさうあめん文ユヌシを見せけるまゝ何しの
事し見ハまうしてまるわるしさ毎に見れと申しまう
あわるとゝもなんことまもなうぬへしとてまれ大持ぬ

其一

京うちくはしある日の日ひるまてあの雪もきく
わりて東の地のあしきさうへ申しあるにみえけいさされ
毎さしあるまうり新くの頭見仰のてとも見給ニり

まくらとみれは湊に任野何ろうに蚊のまくはさき
をなかく寺の何ろふ隅田川まのこ原業平も
云の宮ふられはうもめ見ふうとゆうり思われく古今の
ことうさく見れは吉のきのふ社旅を待るなる
旅ねすしきそのうしくはむり見して相見あてり
らゆんとま俤ろ法き人ゆりしくきれもまふは
法風拜よこ母のうえもころ面まく志すくれ
さ母おれきしすまるも都りしく旅のうきをなく
さ母れくこ母ともとなてはなをかしこはいみこと
いふゆんとはうるに見ゆきくこてのうま岸よ木の

あるなりきるとていうもさ思われける石何り里
又岸の石になりしるさ母のも何り沖のうこにまく
法をきすてをろくひろふをその見ゆるはいうなる
そのそと見ゆは鯨とも云とつふろのまくも見えき
こきひろる見ゆるまふはむうふくしまる吹風とて
帆もすきけを甲斐まてこしアワケとあらくるま
あるる遠風吹来く停まし氣吹の入江は
好ここえまなりしたえは三味うさまする中の
姉をきりきるこそ漆入何しはいうなん何しき
法風もいさうるあを色かしぬさ母なり夷人の家

も深くに無縁く何ころなくすゝみれハさる浦と
まんところ高家ハすゝみてもしみハ宿の軒下に
に徒きしてころろよく社まふのかくろハ何りけり
何まふうてかとに見ゆ晴れとさし免て打つ見ゆ
子ニ七日すてと何りて三日路わたく中すし候